拝啓

厳しい暑さが続くこの頃、いかがお過ごしでしょうか？　暑中お見舞い申し上げます。長らく「暑さだけは堪え難い」…そんな暮らしをしてきた私は、期せずして、先の二月、まだ肌寒かったころに故障したエアコンをそのまま放置し、この夏を乗り切ろうとしています。

日中、近年になかったほどたっぷり汗をかいているせいか、夕方の涼やかな時間帯がこれまで以上に心地よく感じられ、青春時代、少年野球に興じていた季節のころを思い出し、不惑を迎えた今、かえって新鮮な気持ちで満たされています。そんな健やかな気持ちとは裏腹に、夜から早朝にかけての制作時間は、音を出す家業ゆえ、窓を閉め切っての作業となるため、外の涼しさとは対照的に、この部屋は高温多湿となります。これまでであれば、エアコンで温度調節をして、休むことなく作業できたわけですが、今はそうはいきません。熱気に満ちた部屋を換気しなければ、心と身体はもちろん、楽器も守れない…。途中、何度となく作業を止め、一息つかなくてはならないのです。何とも効率のよろしくない状況ではありますが、充満した熱気の中に身を沈めていると、「これまでの営みが、あまりに無理をしすぎていたのではないだろうか？」と、自然の摂理から遠ざかってしまっていたこれまでの暮らしぶりについて、独り回想します。

さて、前置きが長くなりましたが、今月末、新作を発表することになりました。ご案内にありますとおり、株式会社 地球快適化インスティテュート（株式会社 三菱ケミカルホールディングスグループ）との協働によるもので、「化学とアートの融合により、快適＝KAITEKI とは何か？」を考える展覧会「KAITEKI のかたち」展に参加します（7 月 29 日〜31 日 @スパイラル）。

私の作品は「Muse The Chemistry（ミューズ・ザ・ケミストリー）」。無から有を生み出すという、人間の英知の結集ともいえる「化学」。そのダイナミズムを直感的に体感してもらうべく考案したこの作品は、会場にて、実際の化学反応＝「BZ 反応」を再現します。淡い紫色から黄色へ、そしてまた紫色へ…と周期的に色変化を起こす特徴を備えるこの反応は、透明の 3 つの溶液を混ぜ合わせることでその現象を再現します。しかし通常は、数分程度しかその状態を維持できません。これを、今回の作品では、10 時間、継続して展開させます。

もちろん、そこには自身作曲による音楽が添えられます。楽曲は、BZ 反応の化学反応式や色変化の美しさから着想したモチーフを素に、化学が自ずと物語る「自然界に起る悠久のストーリー」を象徴的に、かつ叙情的に彩る内容となる予定です。周期的に色変化する化学反応と音

楽のアンサンブル——この作品を端的に表現するならば、このようになるでしょう。しかしながら、この「Muse The Chemistry」から発せられる世界観は、化学が築き上げてきた宇宙と同じように、無限です。

これまでの私の作品をご存知の方からすると、この作品は、見た目の派手さ、愉快さはほとんど感じられないことでしょう。私は、この作品の製作期間中の出来事から多くを感じ取りました。「あの日」の出来事がその発端であることは言うまでもありません。大切なものを守り通すためには、その実、想像を超える努力と忍耐が必要です。そして、そうまでして守ってきたものは、思いのほか…。この作品が物語る世界は、理想と現実の狭間で葛藤する我々の日々の営みそのもののように思えてならないのです。とは言え、そこには僅かでも希望の光が差し込むときが訪れるはず——。是非、作品をご覧いただいた上で、様々、ご想像を巡らせていただければ光栄です。

本作のための構想を始めたのは、2010 年末。作品化が決定したのは、2 月初旬——そして「あの日」を経て以降、実際の化学反応そのものを見せることについて、自問する日も少なくありませんでした。しかし、「いまだからこそ」…その強い思いを抱いての発表となります。

最後に、この作品のために寄せたテキストをご紹介します。

絶えず色変化を続ける化学反応の様子と音楽による作品。それぞれが自律した周期を持ち展開していくが、誰にも計りし得ない「あるとき」、互いに寄り添いアンサンブルを奏でているように映る瞬間に遭遇することだろう。その奇跡にも似た出来事は、「化学の女神」を表象すると言えよう。これは、自律し独立した存在でさえも、ときに寄り添うという ロマンティックな事象をみつめると同時に、化学のダイナミズムを物語るドラマである。

我々には計り知ることのできない「あるとき」——化学の女神が微笑む瞬間が、どうか今、皆様のもとへ贈り届けられますように。

敬具

川瀬浩介

2011 年 7 月 18 日